

# 復興「事業」は終わっても、 復興は永遠に続く

## 「災害復興計画」の終わり

阪神淡路大震災から24年、新潟県中越地震から15年、そして東日本大震災からはこの3月で丸8年を迎えます。東日本大震災で被災した地域の多くは、2018（平成30）年度が災害復興計画の最終年度となっています。各復興事業がどこまで進んだのか、達成されたのか、完了したのかと評価を求められ、それらを総括しながら復興計画に続く自治体それぞれの後継計画（総合計画）に引き継いでいくこととなります。

感動を覚えたことを思い出します。一方で、通常事業が復活して初めて、これで終わりではないのだと気づかされ、復旧だけではなく、復興を目指しているのだとあらためて認識することができました。しかし、「復旧」と「復興」の違いを厳密に検証したことはありませんでした。

## 復興とは

広辞苑第七版には、「復旧」は「もと通りになること。もと通りにすること」、「復興」は「ふたたびおこること。また、ふたたび盛んになること」、「おこる（興る）」は「潜在している力がおのずと活動し始める意」と記載されています。「復旧再び」「興る」「盛んになる」とは決してハード面が整備されることだけで達成されるわけではなく、一人一人が元気になる、さまざまな活動が広がることを指しています。

未来図会議②では繰り返し「元気で健康なまちづくりで目指すこと」(図)を確認し続けていました。確かに震災で基礎条件である事業を、生活基盤を、人財を失いましたが、それを少しずつ取り戻しつつ、常に上位の目標である Well-being & QOL

昨今、自然災害が続いたせいか、多くの場所や機会で、「いつまでが復興なのか」という声がよく聞かれます。確かに復興計画や復興事業、復興予算には当然終わりが来ますが、復興そのものには終わりがありません。そう思うものの、うまくそのことを言葉にできていない自分たちを反省し、今回の原稿を書き進めました。

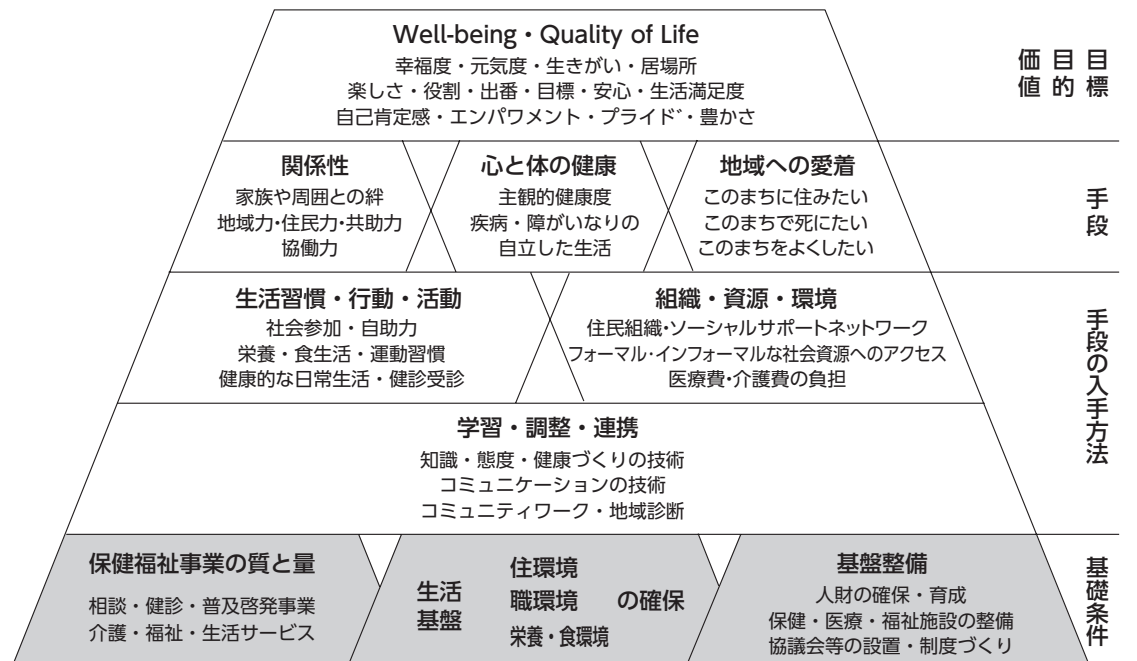
## 「復旧≠復興」ではない

11（平成23）年の秋、「復旧ではなく、復興へ」と書かせていただきました。震

を意識し、それらを手に入れるために何に取り組みすべきなのかを考え続けていました。本来であれば被災前からそのような取り組みが求められていたのかもしれないが、ある意味多くのことを失ったからこそ、原点に返ることができました。そして、この取り組み姿勢こそが「復興」であり、あらためて平常時からこのような視点での取り組みが求められていたことを再認識させられました。

震災後、佐々木は長崎を訪れた際、平和祈念像が

図 元気で健康なまちづくりで目指すこと



佐々木亮平  
(ささき・りょうへい)

岩手医科大学  
衛生学公衆衛生学講座 助教  
陸前高田市はまかだ運動推進  
アドバイザー

●  
連絡先：〒028-3694  
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1  
TEL：019-651-5111（内線5775）



岩室紳也  
(いわむろ・しんや)

ヘルスプロモーション  
推進センター  
(オフィスいわむろ)  
陸前高田市ノーマライゼーション大使

●  
連絡先：<http://iwamuro.jp>

震災後は失ったもの、なくなったものを取り戻そう、少しでも震災前の状態に、姿に近づきたい一心で、復旧に向けて被災地の誰しもが動いていました。震災でストップした母子健康手帳の交付や乳幼児健診、予防接種といった当たり前にあった事業を早く復旧させることを目標に、何ができるのか、何が必要なのかを考え続けていました。国内外の多くの方々の支援をいただき、鮮やかな色のポスターを作成して予防接種や健診を行うことができたときは、被災により町全体が壊滅し、色（カラー）を失ってしまった

1955(昭和30)年に建設された事実を知り、被爆からわずか10年で、よく建設まで至ったのだと、強い衝撃と驚きを覚えました。平和祈念像は当時を生き延びた人、戦後73年の今を生きる人、当時の経歴を語ることができる人、語らぬまま過ごされている人のどなたにとっても犠牲者の鎮魂や冥福を祈る上でも非常に重要な存在、シンボルになっていることは論を待ちません。年月が流れた今もなお、このころの復興が続いているのだと実感させられました。

### 「事業脳」とならないために 災害をきっかけに

そもそも、被災、復旧、復興といった発想自体が事業脳ではないでしょうか。確かに被災地にとって、災害から立ち直るための復興関連予算は大変重要なものですが、ほぼすべて期限付きです。それこそわれわれが陸前高田市に入り続けるための予算も通常の事業予算の中にはありません。なぜなら、各自治体の専門職に求められていることは与えられた事業を定数の職員でこなすことです。建前上、住民のQOLの向上は計画にうたわれていますが、「QOL向上事業」や「元気で健康なまちづくり事業」

### 「スーパーはまかだ」で このころの復興を

陸前高田市で推進している「はまっつけらいん、かだっつけらいん運動」<sup>3)</sup>は、本誌でも繰り返し報告しているとおり、所属や立場、性別、年齢にかかわらず、多くの人それぞれできる範囲で集まってお話をすること、ところが落ち着いたり、新しいアイデアが生まれたり、互いの工夫を共有したりと、人と人がつながり続けることで生まれる元気づくり、居場所づくり、地域づくり運動です。カール・ロジャースの言葉のとおり、人は話すことで癒されるということから、雑談でもいい、雑談が大事というメッセージも同時に発信してきました。

しかし、最近、はまかだにもグラデュエーション、質の違いがあることが分かってきました。私たちが日々、生活をしている上での多くの人とはまかだを振り返ると、この人とは雑談が楽しい、この人にはここまで話せる、この人には家族の愚痴も聞いてもらえる、この人とは仕事上の話だけでなく、場面場面、相手次第で、話す内容や程度を自然と使い分けています。一見当たり

なるものもありません。

しかし、災害からの復興にたずさわる経験を通して、被災前から「QOL向上」や「元気で健康なまちづくり」という視点は必要不可欠なものであり、災害は原点に立ち返るきっかけだったことに気づかされました。と同時に、事業の復旧に気をとられる事業脳から脱却ができないと、「復興」は掛け声倒れになり、気が付けば事業の復旧や復興事業の実施で終わっていたということになりかねません。逆に言うと、被災していない地域こそ「QOL向上」や「元気で健康なまちづくり」といった視点で取り組み続けていなければ、被災した瞬間に事業脳全開になる危険性が大だといえます。

### できていたことはできる、 できていなかったことは すぐにはできない

佐々木は先日、陸前高田市出身で、現在は岩手県外の大学生の方から、将来、保健師として戻ってきて働きたいという相談を受けました。とてもうれしいことでした。自分が生まれ育った町で働きたい、復興のために力になりたいという若い皆さんはその地域にとっては何ものにも代えがたい大

前、でもすぐ高度なことを私たちは日々、無意識の中で繰り返しながら生きているのです。日常的な「はまかだ」を大事にしつつも、自分自身のところがいつもよりつらくなったりと感じたときに「スーパーはまかだ」の時間を持つことが大事だと考えるようになりました。

東日本大震災から間もなく8年になるからこそ、被災地でもさまざまな行き違いが起こり、ところがつらくなる人がいらっしやいます。もちろん、精神科医や臨床心理士の方々のお世話になることもあるでしょうが、専門家に話を聞いてもらえる時間や回数には限度があります。震災後に各地で行われてきた傾聴をベースに、少し積極的に、少し深い「はまかだ、スーパーはまかだ」を広げられたらと考えています。

このように思うようになったきっかけは、ここがつらくなつた方と向き合う機会をいただき、本音で話す深い「はまかだ」を通して、その方だけではなく、佐々木や岩室もつらい状況を乗り越えるヒントをもたらしていたことに気づかされたからでした。

もつとも、ずっと前から実践している市民の方々も大勢いらっしやいます。われわれ

きな力になります。東日本大震災で被災した多くの地域は、人口減少が著しく、実際にどうやって人をつなぎ続け、復興を推し進め続けることができるのか、大きな課題を抱えています。こうした課題の解決のためには、日頃、当たり前のようになっていること、それまでできていたことがポイントで、そうした部分をあらためて見つめ直すことで、進み続ける力につながると信じています。

陸前高田市では「ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり」を推進していますが、その一環として2018(平成30)年11月に震災前から実施していたイベントが第12回AIDS文化フォーラムin陸前高田2018として開催されました。このイベントが始まった当初は、エイズを通して、人と人とのつながりを考える社会づくりを目指していました。できていなかったことはすぐにはできないからこそ、日頃からいろんな方と出会い、つなぎ続け、またさらに一緒にできることを少しずつ増やしていく——平成から新しい「時代」に突入する今年だからこそ、あらためて、こうしたことを強く意識し、大事にしていきたいと思えます。

れもスーパーはまかだでいろんな人が救われる経験を繰り返す中で、あらためてその意味を実感し、広げたいと考えました。スーパーはまかだの相手は家族であったり、恋人や友人であったり、恩師であったりと、人によつてさまざまだと思います。自分の内面とも向き合い続けるような時間を、話してお互いに尊敬や尊重の気持ちをもちながら自然と楽になり、自ずと自分の気持ちが整理され、客観的にもなれる時間、そういう時間を持つことで、つらくなっている自分のところが癒されていきます。これもまた、被災前から、日常的に大事にしたい視点です。皆さまの地域でもスーパーはまかだが広がることを祈念しています。

### 文 献

- 1) 佐々木亮平.「復旧」ではなく「復興」へ～復興へ向かう陸前高田市の今・第五報～.月刊「地域保健」.2011, 42(9), 54-61.
- 2) 佐々木亮平, 岩室紳也. 災害を支える公衆衛生ネットワーク 東日本大震災からの復旧、復興に学ぶ・6.「場」づくりを意識した企画調整機能の重要性.月刊「公衆衛生」.2012, 76(9), 52-56.
- 3) 佐々木亮平, 岩室紳也. 災害を支える公衆衛生ネットワーク 東日本大震災からの復旧、復興に学ぶ・9.このころのケアとは ポピュレーションアプローチの視点から.月刊「公衆衛生」.2012, 76(12), 61-66.